

ミエル・アグワラ (Myel Agwara) 儀礼後の社会変容 —ウガンダ共和国・西ナイル地域・G村における死の意味づけ—

What Happened after the Ritual of 'Myel Agwara':
The Deaths that Occurred in the G village of West Nile in Uganda

田原 範子
Noriko TAHARA

西ナイル地域に住むアルル人たちは、地域や家族の長など責任ある人物の死後、死者祈念儀礼ミエル・アグワラ (Myel Agwara) を実施してきた。死者はこの儀礼を経ることで安息を得て、生者を脅かすことはなくなるとされる。アルル人は、元英国保護領のウガンダ共和国 (以下、ウガンダ) と元ベルギー統治下のコンゴ民主共和国 (以下、コンゴ) に分割された民族であり、現在、約3分の2のアルル人はコンゴに住み、ミエル・アグワラ儀礼は日常的に実施されているという。ところがウガンダ側におけるミエル・アグワラ儀礼の実施は1980年代が最後である (Tahara, 2012)。

2009年8月、私は故Cの親族クランにミエル・アグワラ儀礼の実施を提案し、そのための資金援助を申し出た。故Cは、生前、クランのリーダーの後継者としてU、Uを助けるべく副リーダーのLを任命していた。そこで、今回の儀礼の準備は、UとLを中心として行われた。儀礼準備のためのG村の第1回ミーティング (2011年2月6日) で、私は故Cの姉の名前アナ・ニャウヌ (Ana Nyaunu) を授けられ、一族のメンバーとなった。第2回ミーティング (2011年8月13日)、第3回ミーティング (2012年1月3日) を経て、2012年3月2日から4日にかけてミエル・アグワラ儀礼を行った。実際は、友人関係のクランを招待できなかったため、ミエル・アグワラではなく、セレワ (selewa) 儀礼の様式による再興であった (Tahara, 2013)。来場者はG村の住民だけではなく、Cのクランや親類縁者などがネビ県の村々やコンゴから集まり、1000人以上に達した。儀礼終了後、G村の人びとは口々に「これは始まりに過ぎない。いつか本物のミエル・アグワラ儀礼をするから、見守っていて欲しい」と私に感謝の言葉とともに決意を述べた。

しかしその後、子供と女性の死を契機として、同じ地所に住んでいた親族のあいだに争いがおき、故Cの2人の弟の家族、副リーダーLの家族、Lの弟Jの家族、計4つの家族が村を追放された。本稿では、ミエル・アグワラ儀礼の後、この一族内でおきた死とその顛末をめぐる出来事について、関係者たちの証言によって時系列で紹介する¹⁾。そして、クラン内の葛藤はなにゆえもたらされたのか、それは儀礼の再興と関係しているのかについて考察する。

キーワード：ミエル・アグワラ、ティボ、アビラ、ジョク、アジョガ (呪医)、アルル人、ウガンダ共和国

はじめに

私が、ウガンダでアルル人のJに出会ったのは2001年2月だった。Jは船大工として小さな漁村で働いていた。Jは、アルルの伝統を担うクラン・リーダーを代々務めてきた家族の一員

で、故郷のアルル人の文化や慣習をくわしく話してくれた。興味をひきつけられた私が、Jの故郷である西ナイルのG村に、その父C氏を訪ねたのは2002年8月であった。Jは、Cの第4妻の第7男にあたる。図1と図2の親族関係図に、本稿で登場する人物を記した。

図1、故Cの兄弟関係図（本文中に登場する人物のみアルファベット表記）

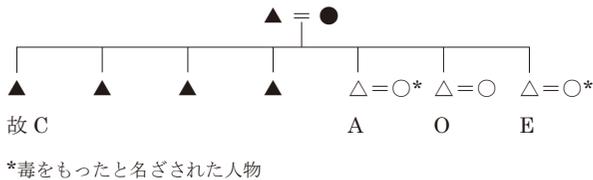
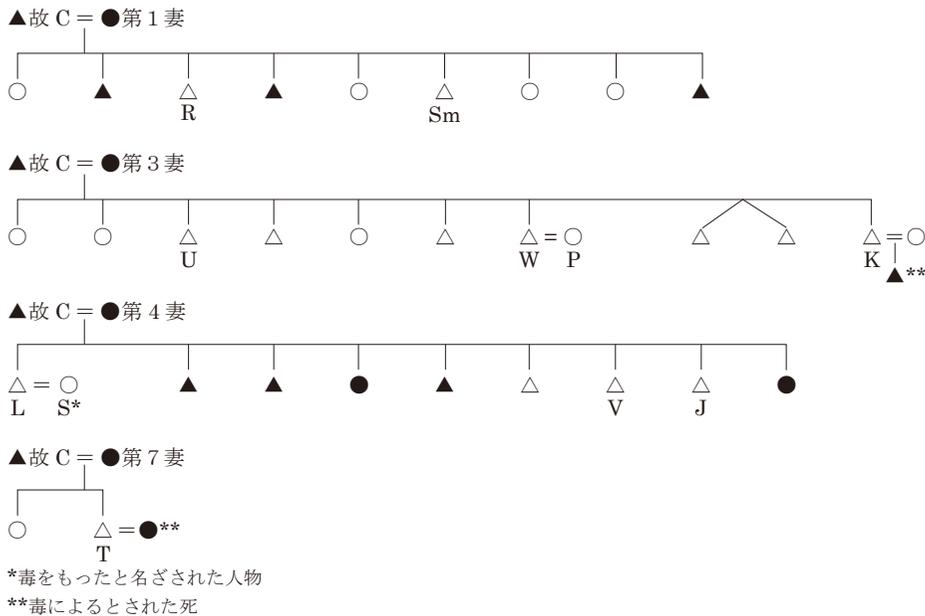


図2、故Cの婚姻関係図（関係する妻と人物のみ表記）



故Cは1911年7月13日に生まれ、43年間、公務員として働き、パモラ（Pamora）一族に属するG村のジュパウヌ（Jupa unu）クラン・リーダーを務め、村の人びとから慕われた。生涯に8人の妻をもち、46人の子供をもうけ、2005年3月13日に94歳で逝去した。

アルルの文化において、Cのような公的にも私的にも成功をおさめた人物は、逝去直後の葬式の後、数年後に弔い上げの儀式であるミエル・アグワラ儀礼を実施することになっている。ミエル・アグワラとは、「アグワラ笛の踊り」という意味である。アグワラ笛は木製の横笛で、短い50センチメートル弱のものから、長い1メートル余のものまで、長短あわせて8本で1セ

ットで、悲しみを奏でる楽器である。したがって、ミエル・アグワラは、「泣くための踊り」とされる。ミエル・アグワラの儀礼を統率するのは、呪具アンバヤ (*ambaya*)²⁾ の力である。

死者の親族側クラン (以下、ホスト・クラン) は5年から10年、時には10数年かけてミエル・アグワラの準備をする。親族たちは会合を重ね、ミエル・アグワラに招待するクラン (以下、ゲスト・クラン) を決める。ゲスト・クランは、アンバヤを使う人びとに統率されて、ホスト・クランの地へと到着し、共にミエル・アグワラ儀礼を行う。ゲスト・クランの到着にあたって、すでに呪力による競合は始まっている。

ホスト・クランが準備した儀礼の場には、カジャギ (*kajagi*) と呼ばれる細いポールが立てられる。カジャギは、アンバヤの呪力で守られている。ゲスト・クランは、ホスト・クランに気づかれずに夜中に到着し、そのカジャギに登らなければならない。ホスト・クランのアンバヤの力が強ければ、ゲスト・クランは道に迷い、夜中のうちに到着できず、カジャギに登るのに失敗する。その場合、ペナルティとして牛1頭をホスト・クランに支払わなければならない。ゲスト・クランのアンバヤが強ければ、夜中に到着し、カジャギに登ることができる。

次に、ゲスト・クランとホスト・クランは、アグワラと太鼓で競演する。アンバヤの呪力の強い側のアグワラと太鼓は、大きな音を響かせる。そして呪力の弱い側は、吹いても叩いても、アグワラと太鼓は音を出さなくなる。また儀礼に欠かせないビール (*kwete*) の入った壺にはアンバヤがまかれる。こうすると壺のビールは、どれだけ大勢の人が飲んでも無くならないという。こうしたアグワラの競演は3日間続き、最後に死者の墓で、アグワラを演奏し、泣いて、踊って、儀礼は終了する。

Cが、クラン・リーダーの後継者に任命したのは第3妻の長男U、そのサポート役の副リーダーとして第4妻の長男Lであった。リーダーの仕事は、クラン内の争いごとなどを治め、クランの安全と発展をはかることである。そのため、祖先の魂であるティボ (*tipo*) を祀るアビラ (*abila*) とジョク (*jok*) を管理・維持する任務が課せられる (田原、2011)。

アルル文化において、ティボとは人間の誰もがもつ魂であり、英語では *spirit* と訳される。肉体の消滅後、ティボは死者の世界へ行くが、生者とも関係をもつ。ティボからのメッセージは、夢や自然の兆しなど多様な形式で生者に伝えられる。ティボのための安息地がアビラとジョクであり、アビラは父系リネージが、ジョクは母系リネージが祀られている。

しかし、キリスト教化が進んだこの地域では、ティボにかかわる行為はタブー視されている。Cは、死の床でキリスト教の洗礼を受けられることになった。洗礼のためには、アビラとジョクを廃嫡しなければならない。そこでCは洗礼を受け入れる直前、秘密裏に息子のUとLを呼び、アビラとジョクを託した。Cの敷地内ではなく、少し離れた場所に住んでいたUは、Cのそれらを自らの敷地内へと移設した³⁾。ジョクの管理は、Uの母、つまりCの第3妻に担われていたが、高齢のため2011年にUの第一妻へとその管理が継承された。

今回の儀礼再興のために、Uは2011年6月、アビラとジョクを刷新した。G村から18人の長老が集まり、Uはアビラのために1頭の山羊を、ジョクのために3頭の山羊を供犠した。ミエル・アグワラと直接関係しないが、故Cの弟Oは、2012年2月に山羊を提供してUからアビラの種を受け取り、自身の敷地内にアビラとジョクを作っている。

副リーダーのLは、アビラとジョクには関与せず、Cの敷地内に居住し、クラン内の実務、さまざまなミーティング等を取り仕切っていた。私を知り合ってから、UとLは互いに訪問し合い、飲食を共にし、仲良く任務を遂行していた。こうした関係に変化が訪れたのは、Uの弟K（故Cの第3妻の第7男）の息子の突然の死であった。本稿に関連する出来事を表1にまとめた。□で囲ったのは、クラン内の女性による毒殺とされた死である。

表1. G村とCクランにかかわる出来事

	G村内の出来事	Cクラン内の出来事	ネビの法廷
2011年	2月 ミエル・アグワラ第1回ミーティング 6月 8月 ミエル・アグワラ第2回ミーティング	Uによるアビラとジョクの刷新	
2012年	1月 ミエル・アグワラ第3回ミーティング 2月 3月 ミエル・アグワラ儀礼 12月	Oによるアビラとジョクの刷新 第4妻（1928～2012）の死	
2013年	10月 11月 12月 コミュニティ・ミーティング L邸の放火未遂	□Kの子どもの死□ Cクランによるアジョガ訪問	Lによるネビ法廷への提訴
2014年	1月 A家族とE家族（故C氏弟）がG村離居 11月	第3妻（1919～2014）の死	
2015年	3月 8月		3月11日開催（L側申し立て） 8月7日開催（K側申し立て）
2016年	4月 長老Dakiの葬式 5月 L邸の放火・焼失 L家族がG村離居 6月 J家族がG村離居	□Tの妻の死□	Lによる提訴取り下げ

1. 子どもの死をめぐって

2014年2月、G村を訪問した時、私はKの息子が2013年10月に亡くなったと聞いた。私は2013年8月の訪問時に、その子を撮影し、現像した写真を持ってきていた。写真をもってお悔やみに行くと、その母は、写真を見るなり、泣きくずれて部屋に入ってしまった。父親であるKが写真を受けとって「この赤ん坊は、病院に連れて行ったが、1日で亡くなってしまった。写真は、思い出として置いておくから、妻のことは気にしないように」と言った。

ウガンダの村落部で聞き取り調査をしていると、子どもを失った人の多さとその失った数の多さに驚く。病気や事故、時には誘拐など、さまざまな理由がある。ほとんどの場合、地理的・経済的な理由で病院で治療することは難しい。Kたちの悲しみは想像を絶するが、子どもを病院まで連れて行き懸命に手当てをしたのだから、時間が解決するだろうと私は考えた。しかし、これが安易な考えであることを、すぐに私は知らされた。

1.1. 2014年2月

私がG村を訪問するようになって以来、いつもW（故Cの第3妻の第4男）とその妻Pの家に滞在している。しかし到着したその夜、Jが、Wの家でくつろいでいる私を呼びだして、「荷物をまとめて私の家に移れ」と命令した。私は何が起きているのか、まるで理解できず、ただ驚いた。Pは私の友人で、その夫Wは良き相談相手である。強硬に主張するJに、私は「意味がわからない」と伝え、家移ることを拒絶し、Wに相談した。

■Wの話

LとKの間で何か争いがあったのかもしれない。それについて、私たちにはわからない。この件にJは関係ないが、浅はかにもLと一緒に行動している。Jが、あなたにJの家に移れというのも、Lが考えたことだろう。しかし、最初にあなたをこの家に連れてきたのは、Jではなかったか。自分たちでは無理だと判断して、ここに連れてきたのではないか。あなたを移動させようとする家で、何も食べたり、飲んだりしてはいけない。

■Wの妻Pの話

あの女（Lの妻、S）は、ただちに出て行かなければならない。Kの赤ん坊を殺めたと言われている。彼女は、以前はそんなことをしなかった。良い人だと私たちも思っていた。あなたに対して、私の夫Wがあそこの家で飲食するなどというのは、その危険を考えてことだ。

Pは、この地域の女たちのまとめ役で、地域行政の議員（Parish Councilor）を務めたこともある。彼女は、自分のかわいがっていた猫が、ある朝、死んでいたことを根拠にあげながら、この村に何らかの毒が持ち込まれたようだと話した。

翌朝、私はLとその妻Sを訪ねた。LとSの家は、Wの家の隣にある。いつもなら私が到着すれば、すぐに挨拶に来てくれるはずのLもSも、Wの家にいる私に会いに来る気配はなかった。Sは、台所で黙々と酒の蒸留をしていた。私をみて笑顔を浮かべて挨拶したもの、いつもの快活さはなかった。毎朝、畑を眺める家のベランダでラジオを聞きながらお茶を飲むのが日課だったLもまた、ラジオもつけず、ベランダではなく家のなかでぼんやりと座っていた。

■Lの話

私の父、故Cの弟であるAとEの2家族は、すでにここを去った。1家族はA村に、1家族はE村にいる。私の妻（S）は、ここに42年間、暮らしているのだ。もしも彼女に何か問題があれば、私の父Cが追い出していたはずではないか。

Lの言葉も少なかった。誰もがこの件について語りたがらないように感じられた。私は、G村の青年組のリーダーJmを訪ねた。彼は、故Cと第1妻の孫にあたり、ミエル・アグワラ儀礼のときに、若者を組織して、ンダラ（ndara）とよばれる木琴の演奏を企画した。彼は困ったように言葉少なに説明した。

■ 故 C の伯父の孫 Jm の話

2013 年 12 月に、コミュニティの会合が開かれた。すべてのメンバーが、S を追い出すことに賛成した。U は、リーダーとして、この決定を支持することになった。

私を W 宅から移動させようとした J に、いったい何が起きたのかと聞いた。

■ J の話

L の妻と故 C の弟の妻 2 人が、残忍 (cannibal) だということで、ミーティングで青年組によって追放が決定されたのだ。そのミーティングの議題について、L も U も何も知らされず、その場で初めて協議の内容を知ったということだ。

知り合いからの断片的な話をつなぎ合わせてわかったのは、次のようなことだった。

K たちは、子どもの死は毒によってもたらされたと申し立てた。その疑惑は、故 C の弟 A と E の妻 2 人と、クランの副リーダー L の妻 S に向けられた。この地域では、死や病気にかかわる問題は、アジョガ (ajoga: アルル語で「呪医」を意味する) に相談して、解決することが多い。子どもの死後、K、K の妻、L を含めた村人たちは、近隣のパロンボ (Parombo) 村とカサト (Kasatu) 村にいる 3 人のアジョガを訪れた。そこで K たちの疑惑が正しいこと、つまり親族の女性 3 人が、K の子どもに毒をもったことが証明された。

それを受けて、2013 年 12 月、コミュニティ・ミーティングが開かれ、U は仲裁をはかろうとしたが、村人たちの賛同を得ることができず、リーダー失格だと非難された。そして、故 C の弟の妻 2 人と L の妻 S の追放が、全会一致で申し渡された。故 C の弟たち 2 家族はすぐに G 村を出たが L は S の潔白を主張した。K、K の妻、K の長男が、L と S の家を長刀で切りつけて、火をつけた。L は警察を呼び、3 人は逮捕された。3 人は 800,000 ウガンダシリング (約 25,000 円) 支払って、釈放された。L は、放火事件をネビ (Nebbi) の法廷に提訴した。

1.2. 2014 年 8 月

いつもどおり W 宅に到着し、荷解きをした私に、U と L はそれぞれ別々に挨拶に来てくれたので、これまでの状況が変化していないことを知った。かつては、U と L の仲の良さをうらやんで、L の弟 J が私に、「L は、本当の弟である私たちのことをなおざりにしている」とこぼすほどだったことを思い出した。

私は G 村に到着した日と出発する前夜には飲み物を用意して、小さなパーティを開き、みんなと楽しむことにしている。この日も、いつもどおり 1 カートンのビールと 1 カートンのソーダの手配を L に頼んだ。バイクタクシーの運転手をしている、故 C の第 7 妻の息子 T (第 7 妻が早く亡くなったため、L と J の母である第 4 妻が養子にした) が、W の家に運び込んだ。

W の家では、W、U に加えて、故 C の第 1 妻の次男 R らが座り、この間の出来事を私と話していた。L がいない以外は、いつもの風景だった。私はこっそり T に、「あのコミュニティ・ミーティングがあったから、L はこの場に参加するのは難しいだろうか」と聞いた。すると T は、

「コミュニティ・ミーティングは、私たち家族の懸案事項ではない。一緒に飲むかどうか、Lに直接聞いてみてはどうか」と答えた。私が青年組のTが、Lに対してコミュニティの判断よりも、自身の判断を優先していることを知り、安堵した。私はLの家を訪ね、「W、U、Rなど、みんな家にいるから、一緒に来て飲まないか。もし同席したくなければ、私がビールとソーダをここに運び込もうか」と聞いた。Lは、しばらく考えて「みんなが来ているのか」と聞いたので、そうだと答えると、「では行こう」と、Wの家に入った。しかしそっと部屋の奥の小さな椅子に座り、会話に参加することはなかった。いつもどおり私たちをもてなしてくれたPは、彼らが帰った後、「コミュニティは彼らの存在を良く思っていない」と私に教えてくれた。

1.3. 2015年2月

村の日常は戻ったかに見えた。Lは畑を耕し、Sは酒を醸造して近隣のマーケットへ小売に出かけていた。昨年、Sを「あの女」と呼んだPが、水汲みにいくSと普通に会話しているのも見かけた。放火事件は、ネビの法廷で係争中であった。来る3月11日の法廷で、Kが1,300,000ウガンダシリング（約4万円）を支払い、Lの家を4人の担当者に搜索させる予定だという。ここからネビまで1時間以上かかるが、法廷主導の科学的な捜査で、Sにかけられた嫌疑は晴らされて、事態が沈静化するだろうと私は楽天的に考えていた。

■Lの話

今回のことは、初めてのことでない。これで3回目。いつも同じアジョガが、問題を起こす。彼は、Uと同じ家族に属している。つまり同じ母親（母の姉妹のこと）を持っている。アジョガは、物語を作る愚かな人たちだ。しかし、教育を受けていない人たちは、それを信じてしまう。Uは、こちら話を聞かず、Kの話だけを信じている。本来は、リーダーであるUが事を治めるべきなのだが、そうではなくKの話を聞くばかりで、こちらに来ることもない。

Uは、あいかわらず自分と同母弟のWの家には来ていたが、隣のLの家を訪問することはなかった。Uに事件の話をついても、私の話にうなづく程度で、無表情を装っていた。

■Jの話

今回のことは、Uの問題になっている。KはUの弟だから。もしも私やTが問題を起こしたら、それは兄であるLの問題にもなる。

アジョガたちは、「背の高い人」とか「背の低い人」とか「色の黒い人」とか伝える。名前を伝えることはなく、「自分の家に、ドアが向かい合っている家の…」などと説明する。パロンボ村のアジョガ、アルナ (Aruna) には、故Cの弟Oの家で田原も会っただろう。ンジュワタ (Njwata) というアジョガは、裸になる。仕事をするときには裸になるので、そう呼ばれるのだ。アジョガというのは、何かを隠して見せることがあるので、自分は何も隠していないということを証明するために、裸になる。

この時、私はルワンダ系ウガンダ人のサイラスと一緒に G 村を訪問していた。彼はこの事件のことは知らなかったし、アルル語を理解できないので人びとの会話を聞くことはできなかった。しかしカンパラへの帰り道、私がこの間の出来事を簡単に話すと、「(Lの妻 S は) そういうことができる人に見える」と私に告げた。そして「最初、彼女に会った時に、そう思った。だから、ご飯を食べるように言われたとき、どうしたものかと思った。でも、私たちは大勢だし、J も田原も一緒だし、大丈夫だろうと考えて食べた。でも、もしも一人だったら、彼女の食べ物を拒否しただろう」と告白した。アジョガは、背が高く、色の黒い女性を魔女として名ざしすることがある。こうしたステレオタイプ化した魔女像に、S は似ているのかもしれない。

1.4. 2015年8月

私は、アチョリ人で L の友人でもある調査助手のバティスタ、日本人の大学生のワタルと一緒に村を訪問した。ちょうどワタルの 20 歳の誕生日だったので、W 宅で誕生祝のパーティをすることにした。バティスタと私は L を伴って、W 宅へ向かった。開いた玄関から、中に U が座っているのが見えた。バティスタと私は家の中に入り、その後ろに続いていたはずの L を待ったが、L はいつのまにかいなくなっていた。私は、あいかわらず状況が変わらないことを知った。

その翌日、私は L、P、バティスタ、ワタルを伴って、マーケットのあるパニムール (Panymur) 町へドライブに出かけることにした。出発しようとする私たちの車の前を、K の妻が横切った。彼女は、車の中の後部座席左側の L を見つけると、激しい視線を彼に向けた。彼女の視線に気づいたのは、助手席にいた私だけだった。私は、係争中の人びとが同じ G 村で共に暮らすことは、お互いにどんなにか苦しいだろうと察した。

■ L の話

S が魔女だという件は、8月7日のネビの法廷で争うことになっている。法廷闘争は時間がかかる。私たちの申し立てが終わり、今度は K 側が申し立てることになっている。U は、K 側の主張を全面的に取り入れている。

■ J の話

L の妻 S だけでなく、私の妻も魔女だと言われた。噂を広めているのは、私の母違いの兄弟だ。その男の妻は、私の妻の妹である。私の妻は湖岸の村に、その妹はこの村にいて、いろんな問題が起きた。その妹も魔女だと言われている。(昨年ここを追い出された) 故 C の弟家族は、妻たちの出身地で暮らしている。

バティスタは、こうした状況について、「あのようにながら集まっているところには、いつも問題が起きる。女性達はいつも問題を捜している」と話した。また同地域出身でカンパラ在住のジミーによれば、3人のアジョガを回って真偽を調べるのが、アルル文化では一般的な方法だという。その上で、3人ともが同じ答えを出した場合、その人はコミュニティに住むことはで

きない。妻の実家か、子どもの住むところへ引越するしかない。身の安全をはかるためには、ナイル川を渡ってマシンディのあたりへ行く方が良い。そういう人たちは、ホイマにも、カンパラにも大勢いるという。

そしてUは、事件について私が何を聞いても、「そうだ」とうなずくだけで、あいかわらず自ら何かを話してくれることはなかった。

2. 暴力の行使

2016年8月、1年ぶりにG村を訪問した私は、人びとの疑惑が暴力として実体化したことを知った。Lと妻Sの家は、壁だけを残して、焼け跡と化していた(写真1)。崩壊した壁はすすで黒くなり、建物のあった地面には、割れた食器、真っ黒に焼け焦げた物が落ちていた。屋根を支えていた柱も根元だけをいびつに残してすべて燃えてしまっている。焼け跡からは、まだ煙のおいがしていた。Lの家は、故Cから相続した敷地内で、もっとも大きく、堂々たる藁葺きの家であった。家の前にマンゴーの木、その向こうにはLが毎朝水やりをかかさなかったオレンジの木々と畑がある。焼かれた家の前にある穀物倉、隣にあるLの息子の家、Sの台所小屋は残り、畑も荒らされてはいなかった。

写真1 焼かれた家



2.1. Sへのさらなる疑惑

Lが妻Sと共に、G村から3キロメートル北の隣村A村に移動したと聞き、私はすぐにLを訪ねた。Lは私を歓迎して、小さな部屋に案内してくれた。Sは、私のために外にある石を3つ並べたかまどで湯を沸かし始めた。1部屋の半分にカーペットを敷き、その上に寝具を置いていた。2つしかない椅子に腰かけて、私はLに訪問の挨拶をした後で、何が起きたのかと問うた。

■Lの話

5月4日に焼け出された。最初は、妻Sの実家のあるパデル（Padel）村に行ったが、6月20日にここA村に引っ越した。ここはいろんな人がいるので安全だ。火事は、夜中だったが、幸いにもけが人も出なかった。…彼らはみんなおかしい。火事を警察に届け出したのは、私だ。誰も何もしようとしなかった。警察は証拠が必要だと言うので、彼らのことを話したが、そのまま放置された。夜中に自然に火があがるようなことはないのに。…私は、ネビの法廷は取り下げて、彼らを自由にしたのに、また別の事件をもってきた。

Lは一族の長老として地方行政の一端を担い、村では女性グループのとりまとめをし、敬われていた⁴⁾。農夫として誇りをもちつつ、音楽と踊りを愛し、軽妙で知的な会話で楽しませてくれたLは、すっかり憔悴した様子であった。メガネの向こうの彼の左目はすっかり白濁し視力が失われていることがわかった。Sが紅茶を「マンゴジヨ（砂糖を入れない紅茶）だけど」とバナナ4本と一緒に出してくれた。しかし、部屋にはそれを置くための机もテーブルもなかった。かつてLの家で、UやJと一緒にSの手料理の食卓を囲んだことを思い出し、悲しい気持ちになった。この時、私はLのいう「別の事件」が意味するのは放火事件のことだろうと考えた。そして村に戻って、もう少し話を聞くことにした。Uが、私の歓迎のためにWの家に来てくれたので、この件について聞いてみたが、やはり「そうだ。燃えた」というだけだった。

■G村長Sm(故Cの第1妻の第4男)の話

あの家は燃えた。どこから火が来たのか誰も知らない。捜査をしたかだって。それはしない。誰も知らないのだ。この話はここまでだ。

Kの子どもの死についても、コミュニティ・ミーティングについても、Smは私にほとんど語ろうとしなかった。故Cの第1妻の1族であるSmは、このクランで最も力をもっているはずだが、故Cの敷地内に住んでいるものの、UやLが仲良く一緒に集っていた頃でも、そこに顔を出すことはなかった。Smの兄で第1妻の次男Rは指物大工で、UともLとも適当な距離を保ってWの家を訪問していた。ただ、Rはクランの長老の1人であるにもかかわらず、軽んじられている様子が散見された。故Cの後継にかかわる何らかの確執があるのかもしれない。

その日、Pの台所小屋で一緒に夕飯をつくりながら、私はここ1年の出来事を話していた。そして火事の話になると、Pは周りを伺い、台所小屋の扉を閉めてから、私に以下のような話をささやいた。

■Pの話

(2016年)4月にTの妻が亡くなった。これには長い長い話がある。Sが毒をもったのよ。…今や彼らはさすらい者になっている。私たちは彼らが近くにいることを望まない。今住んでいるところからも追い出す日が来るだろう。そして今、TとJは、一緒に食べることができない。夫のWなら、もっと話せると思う。

Tの妻の死に、私は驚いた。まだ20歳代前半の元気でチャーミングな女性だった。また、兄弟同様に育ったTとJが夕食を共にできないということも不思議だった。家の放火は、てっきりKの子どもの死に関係するものだと思っていた。私は、夕食のクエンと豆を食べながら、Wに話を聞いたが、彼もこの件については語りたがらなかった。ただ「ネビの法廷は、Lらが自分でとりやめた。たぶん、係争しても結果は不利になるだろうとわかったのだろう」と教えてくれた。

語りたがらない彼らの様子を見て、私は、質問するのはやめた。時間が経てば、わかることもあるかもしれないし、クランの名をもらったとはいえ、G村に住んでもいない私が、何もかも知ろうとするのはおこがましいだろう。しかし、その翌日、当事者のTと青年組のリーダーJmが私に聞いてもらいたいことがあると訪ねて来た。

2.2. Tの妻の死

童顔のTに、いつもの笑顔はなく、目は涙で赤かった。Jmもまた硬い表情で私を見るだけだった。その場で話を聞こうとした私に、一緒にいたバティスタは、「秘密の話は秘密の場所で行うべきだ、誰にも聞かれないところに行かねばならない」と助言した。私たちはJmの家へ移動した。

■Tの話

4月に妻が亡くなった。Sが妻に毒を飲ませた。だから、火をつけた。子供たちは4人いる。下の子と上の子は祖母のところ、中の子2人は私と一緒に。

妻の死の2週間前、おじさん(Daki, 故Cのいとこ)が亡くなり、大きな葬式があった。大勢の人たちが来て、女たちは料理をしたり、客人に水浴びの水を用意したり、忙しかった。私の妻は、赤ん坊(7ヶ月)が病気で、客人が水浴びするための水を汲みに行けなかった。すると罰金を払えと女たちが言った。お金がないから罰金は払えないと答えると、G村の女Alが妻の左耳をひねり、左の頬をはたいた。妻が倒れると、今度はSが腰をけた。

妻は家に戻ると、寒気と頭痛を感じた。薬を試したが効かなかった。そして、毒で腹が満たされるアウォラ(*awora*)の状態になった。妻の親戚たちが来て、アジョガをみつけた。アジョガの話で、諍いがあったことを知った。彼女をアンガル(Angal)病院に連れて行き、体温は37度だったが、治療はうまくいかなかった。

5月7日(ママ)、彼女は実家のパロンボ村に連れて帰られて、コンゴのレンドゥ(Lendu)の人たちが使う薬草を試すことになった。妻の親戚が、レンドゥに行き、そのアジョガより次のような事実を告げられた。

Sが毒草を手に入れて、それをJの妻に渡した。そしてJの妻が、Tの妻が臼で野菜をついているところに、毒草を落とした。AlがTの妻の耳をひねった時、何か(毒草のこと)と一緒にひねった。SがTの妻を蹴った時、何か(毒草のこと)と一緒に蹴った。その後、病院へ連れて行ったために治療が遅れてしまったのだ。

アジョガから得た薬草を与えたが、妻は5月9日、月曜日の午後1時に亡くなった。亡くなって、たった2時間しかたたないのに体は傷み始め、臭いが立ち始めた。これこそが、強制された死、毒殺の証拠だった。AIにひねられた左耳と、はたかれた左側の頬が黒くなった。Sが蹴った左尻も黒くなった。そして腹は膨れて、上へ下へと中で何かが動いていた。一旦膨れて、そして戻って、また膨れて、また戻った。これもまた毒草によるものだ。

親戚が、レンドゥから車で帰ってくる時、車は茂みのなかで滑って動けなくなった。彼らは一晩、茂みのなかで過ごさなければならず、やっと翌朝戻ってきた。他の車は何ごともなく走っていたのに。これもまた、車が呪われていたという証拠だ。

5月10日、すぐに埋葬した。みんなが葬式に集まってくる時に、AIら妻の死に関係した人たちは、自分の荷物を詰めてどこかへ持っていった。何も知らない人たちは、「なぜ、今、そんなことをするのか?」と驚いていた。

そして、Sの家、AIの家が、ガソリンをかけられて燃やされた。妻の死に関係した、もう1軒の家は、ガソリンがかけられただけで、火はつけられなかった。

私たちが妻の葬式に行くと、妻の親戚たちが私の親戚たちを殴ろうとした。しかし義母がそれを止めてくれた。そして、義母は、私の親戚たちを守ったということで自分の親戚たちから殴られた。

兄のJは、私にこう言った。「妻を亡くして、おめでとう」。自分の妻が、私の妻の死に関わっているからだ。私は、Jとテーブルを囲むことはできない。私は孤児だった（生まれてすぐに母を亡くした）。そしてまた孤児たちを作ってしまった。妻が病気になり、バイクを売ってお金を作った。300,000 ウガンダシリング（約8500円）は、子どもたちの面倒をみるために使ってしまった。

私は、Sだけでなく、Jの妻も魔女の疑いがかけられていたことに驚いた。Jの妻は働き者で、賢明に子どもを育てる気丈な女性だ。Jは、気持ちの優しい男で、正しいと思ったことは貫きとおすが、思い込みが激しく、短気でけんか早いところがある。Jが、怒りにまかせて軽率な言葉を口にし、けんかになることは時にあった。Tへの言葉も、妻への疑いに怒ったJが、後先考えずに発してしまったのだろう。JにTの妻の死について聞いてみたが、自身については語らなかった。

■Jの話

Tの妻が3ヶ月前（2016年5月）に亡くなった。これもSのせいである。私は、Kの息子の死について、Sのことを疑わしく思うようになった。Sには何かがあると常々思っていた。

これまで、LはなぜUと一緒にいるのか、いつも私たちは言っていた。私たちを忘れているのかと。今、私の兄VがUの補佐をしている。

今年8月に家族をこの村から連れて行くようにとLからJに電話があり、Jは湖岸の村へ妻と子供を連れて行ったという。その後、Jの妻は、湖岸の村で元気に暮らしている。しかしJ

は、G村と湖岸を行き来しながら土地の耕作を1人ですることになった。

2.3. 2016年12月

私は、Lのことが心配で、2日間だけ西ナイル地域を訪問した。LもSも、G村とは違ってマーケットがあるA村の生活に少し馴染んだようだった。Lは、G村にある自分の畑を耕しに通っていた。

■Lの話

ここは、アルルが多数集団だが、いろいろなクランがあるので、私たちに嫌がらせをする人たちは誰もいない。ここは町 (town board) だ。

この土地、4分の1エーカーを1,200,000ウガンダシリング (約38,000円) で買おうと考えている。売り手は、遠縁にあたる。その人の母はP村、父はここA村の出身である。今、その土地を、石とサイザル麻で区画をしている。屋根は、決して茅葺きにはしない。あの私の家が茅葺きでなければ、燃やされることもなかった。4分の1エーカーあれば、大きな家を2軒、使用人小屋 (boys' quarters) を1軒建てられる。

今年の綿花は、害虫と長雨で駄目だった。1キログラム1,500ウガンダシリング (約50円弱) で売り、今、50キログラム残っている。この土地は綿花に向いていない。普通なら1エーカー1,500キログラムはとれるはずだが、800-900キログラムにしかならなかった。パロンボ村やジュナム (Junam) 周辺は、肥沃なので沢山取れるのだが。しかし、ソルガム、落花生、豆、大豆は肥料なしで育つ。キャッサバ、トウモロコシもできる。G村の土地は、息子が耕作しているが、彼は本当にやる気がなく働かないのだ。

同じ日、UがWの家にいる私のために、いつもどおり歓迎に来てくれた。Lの話をするに「あの女と一緒に帰って来ることはできない」と答えた。穏やかな彼には珍しく、厳しい表情を見せたが、以前のような元気はなかった。

3. 意味づけられる死

子どもの死と女性の死は、アジョガという存在を通して、コミュニティの問題となり、結果的に、故Cの弟たち2家族 (Aの家族、Eの家族) と第4妻の子どもたち2家族 (Lの家族、Jの家族) の追放を惹起した。つまり故Cのクラン内の他者 (異なるクランに属する妻たち4人) が、排除されたのである。その背景には何があるのだろうか。妻を失ったTの見解を紹介しよう。先に述べたように、Tは第7妻の子として生まれたが、母の急逝により、第4妻の養子として育てられた。つまり、TはLとJとは兄弟でもあり、LとSの家の放火事件に関しては首謀者の1人でもある。

■Tの話

この問題を解決するのは難しい。長老たちが友好関係にないからだ。長老の1人は、K

の息子が病気になった時、金を与えてアジョガを捜せと行った。そのアジョガが、死はSによってもたらされたと言った。そこでLは、別の組織を作ろうとした。二つの組織は併存することはできない。Kの息子の死後、Sが犯人であることがミーティングで明らかになったが、Lは否定して、妻を守ろうとした。

今、彼らは生き残るために場所を捜している。何もかもが空気のなかに消えて、リーダーとしてUだけが残った。今、Lのいた場所には、Lの息子が住んでいる。その息子の母はSではない。Lも、Sと離婚すれば、ここに住むことができるのだ。ここではSは害毒なのだ。

彼が指摘するのは、クランのなかにある2つの力である。一方にアビラとジョクを受け継いだUと、他方に実質的なクランの統括の仕事と家屋を受け継いだLがいる。故Cの遺志を継いで、UとLの2人が実の兄弟もうらやむような信頼関係で結ばれ、G村を治めている間、2つの力は1つの力としてクランを統合していた。この均衡がくずれて、1つの力は2つに分かれてしまった。2つの力を1つの力にまとめ上げていたのは、故Cの生前の意志であり、それを守らなければならないと考えるクランの心びとであった。それは故Cへの敬意と畏怖にも由来していたであろう。ところが、弔い上げの儀礼であるミエル・アグワラ儀礼を経ることで、死者のティボは、生者の世界を遠ざかり、安住の地へと向かう。ミエル・アグワラ儀礼の再興により、故Cはもはや生者を脅かすティボではなく、クランの祖霊の一人となった。こうした故Cの存在の変容によって、UとLにクランの未来を託した生前のメッセージは力を失い、過去のものとして破棄されたと考えることはできないだろうか。

3.1. アビラとジョクの相続をめぐる問題

クランの力の源であるアビラを、故Cより相続したのはUであり、ジョクを相続したのはUの妻である。アビラとジョクにかかわる儀礼は、クラン内においても秘密にされている部分が多い。

■Lの話

Uは、ントウン (*ntum*) とよばれる動物の角を持っていて、そこに薬草を入れ、まるで人間に話すかのように話しかける。ントウンをアビラに持っていき、「父がお前に怒っている、そしてお前を殺そうとしている」と話しかける。そのようにして、ントウンによって人を殺させることができる。G村で同じようにントウンをもつ女性が、亡夫の僚妻の娘を殺そうとしたことがある。つまり、ントウンはそれほどの力をもっている。

■Jの話

ジョクのントウンもあり、それは村を回っていて村を兵士のように守っている。Uは、これは故Cから受け取っていないと主張している。

故Cの弟Oは、Uのアビラから種 (*abila kodi*) を分けてもらい、自身の屋敷内にアビラとジョクを作っている。私が最初にそれを見たのは、アグワラ儀礼の前の月 (2012年2月) だった。Oは、家族内の問題を解決するために、アビラとジョクを刷新した。Oの屋敷のジョクは、Oの母とOの妻のために2つ作られた。アビラは、定期的に刷新する必要がある。2015年、Oは、私に次のように話した。

■Oの話

私はUのところに行くことはできない。今の状況は、とても厳しい。アビラもジョクも、Uは、只で渡そうとはせず、支払いを要求する。Uは今、孤立して、孤独な状態になっている。2012年のアビラとジョクを終えてから、私は彼とは連絡をまったくとっていない。彼は、Lの妻Sまでも追いかかおうとしている。すでに私の兄はA村に、弟はE村に移動した。

Lは、私たちにあやまってくれた。故Cの後継を、LはUと共に担うことになっていたのに、それができない状態にあることをあやまってくれた。今、若者たちは好き勝手にふるまっている。Lは、Uを悪いリーダーにしてしまった。Uは問題を解決しようとせずに、ただ片方の側だけに立っている。この状態はクランの長として間違っている。

故Cの弟Oは、UやLにとって、父親と同じ存在である。その彼に、アビラとジョクの支払いを要求することは、敬意を失する行為といわれても仕方がないかもしれない。Oは、子どもの死、妻の目が光を失いつつあることなど、さまざまな問題を解決するために、アジョガを家に呼び、アビラとジョクの維持に心を砕いていた。Oのアビラは、Uがもつクラン全体のアビラとは違い、O家族のためにのみ働く家族用のものである。

2015年8月にも彼は、「アビラとジョクが壊れている。もう一度アビラを作りあげるために羊がいる。カロ (*kalo*: 家) を抜いて刷新するためには、山羊1頭と羊1頭が必要になる」と悩んでいた。「あなたは年をとっているのだから、そんなにアビラにこだわらなくても」とアドバイスする隣人に、Oは「力がないからこそ必要なのだ」と答えていた。そして2016年8月の訪問時、彼と娘はジョク (*Anyodo*) を1頭の山羊で刷新していた。妻の目はすっかり光を失い、娘が家族たちの面倒を見ていた。あとは、自分たちだけのための小さなアビラを作るため、2頭の羊が必要で、3日もあれば作り変えられるのだが、と相談された。そこで、2017年2月には来れないが8月に来るので、その時にアビラと一緒に新しくしようと提案した。しかし娘は「それではあまりに遅い、1月か2月にしなければならぬ」と言う。相談した結果、私はアビラの刷新のために羊1頭分の100,000ウガンダシリング (約3千円) を置いて帰った。

3.2. 土地をめぐる葛藤

故Cから相続した、もう一つのものは、土地である。4家族が追放された結果、故Cの敷地に残ったのはUやWたち第3妻の家族とRやSmたち第1妻の家族だけとなった。

■Lの話

Uがクランのリーダーになってから、ミーティングは機能していない。彼は、ただやりたいことをするだけだ。若者を送り込んで火をつけさせた。私たち家族を崩壊させる首謀者だ。その目的は、まず、私の土地を取り上げて、誰かに与えるためだ。焼けば逃げる、そして家を建てられない。誰も集まることができないからだ。

Uは土地をもっていない。借りているだけだ。私は2エーカー、Jも購入したものを含めて同じくらいある。私たちの父である故Cは、沢山の妻に土地を分けた。それはまた沢山の子どもたちに分けられて、次第に土地は少なくなってしまった。

■Jの話

私の父故Cは、大きな土地を持っていた。寡婦となった姪にも、頼まれて土地をあげた。彼女は、その土地を私の弟Vに与えた。2エーカーほどある。その時、私は湖岸にいたので、もらえなかった。Uの母（故Cの第3妻）は、誰よりも沢山の土地をもっていた。約10エーカーはあった。それはUのすぐ下の弟が使っている。彼は耕作できるが、Uはできないので、土地をもてない。

Uは、Tの土地を否定した。Tの母（故Cの第7妻）は、とても小さい1エーカーほどの土地をもっていた。しかしUは、その土地は自分のだと主張してTから取り上げた。だからTは、今は私の土地を耕している（1エーカーを貸している）。しかしLは、Tはその土地から去り、Uの土地を耕すべきだと主張している。

私自身は、父から1エーカー、自分で得た1エーカー、そして田原が買ってくれた1エーカー（半エーカーだと思ったが、測ってみると1エーカーあったという…筆者注）の3エーカーを持っている。

こうした話は、私に以前の事件を思い出させた。Jは、2014年、故Cの敷地内の自分の家の前に、Sm（第1妻の第3男、現村長）の息子が家を建てようとしていると激怒して、建設を止めたことがあった。私は、その家自体はたいした大きさではないし、土地は沢山あるのだからと思って、Jをなだめた。しかし、土地の所有にかかわる問題は、敷地内に共に住む者同士にとって、私が考える以上に大きな問題なのだ。ミエル・アグワラ儀礼後に顕在化してきたかに見える土地問題であるが、土地の相続と所有・使用にかかわる問題は、常にクラン内で緊張をもたらしていた。

3.3. 僚妻二人の死

ミエル・アグワラ儀礼を実施した2012年、12月に第4妻が亡くなった。敬虔なクリスチャンの彼女は、穏やかな優しい人だった。第7妻の子Tを養子にとって育てた後、孫たちの面倒を見ていた。若い頃の重労働ですっかり腰が曲がっていたが、朝の水汲みをし、畑を耕し、キャッサバをつき、一日中働いていた。夕方には、子どもを膝に乗せて、きれいな高い声で賛美歌を歌っていた。酒も肉もいっさい口にせず、故Cにもっとも愛されていたと息子のJはいう。

第4妻の墓は、故Cと同じ敷地内にある。

第3妻が亡くなったのは、2014年11月だった。彼女は、ジョクを守るものとして精霊的な力をもっていた。私が到着すると、唾を私の両掌に吐きかけて歓迎のムギサ (*mugisa*) をしてくれた。私は両掌を自分の頭にこすりつけて、ムギサを受けた。アルル語のつたない私との会話を楽しんでいた (と思う)。家の前のベランダで煙草を吸いながら、幼い頃住んでいた村の話や結婚した頃のことなど、いろいろな思い出話をしてくれた。彼女は、双子を産んだ時の儀礼で使った双頭の壺を大切に保管していて、部屋の奥から取り出して見せた。私が出発する朝には、カラバーシュの水を口に含み、私の顔と身体に吹きかけ、両掌へ唾を吐きかけて旅行の安全を祈るムギサをした。Oのアビラとジョクの儀礼に連れて行ってくれたのも彼女だった。彼女の墓は、息子Uの敷地内に作られた。葬式には、山羊4頭と牛1頭が必要なほど大勢の人たちが集まり、葬列者たちはアルルの伝統どおり、彼女の遺体を囲んで4日間、寝たという。今、彼女たちは、この地域の死者として故Cと同様、頭をニャラ (Nyala) とよばれる丘の方に向けて埋葬されている。

故Cの妻2人が相続した土地は、すでにその子供たちに分けられて、より小さな耕作地として使われている。彼女らの死は、誰もが耕作地を必要とするなか、各自に分け与えられた土地への意識を喚起したかもしれない。あらゆる機会を捉えなければ、より大きな土地を手に入れることはできない。先に述べたように引越したばかりのLが、すでにA村の土地の取得を考えている。農業に励む勤勉な者ほど、土地への執着が強いのは当然であろう。

おわりに

最後に、本稿で述べた一連の出来事をまとめよう。子どもの死によって、このクランに嫁いだ他クランの女性たち3人が、コミュニティにより魔女という烙印を押された。その決定には、青年組の力が大きく働いていた。故Cの弟たち2家族が村を去り、OだけがG村に残された。魔女とされたうちの一人Sは、Lの支えもあり、G村に住み続けた。リーダーであったUとLは決裂し、故Cの遺志「UとLが2人でクランを統括すること」は不可能となった。次に故Cの第4妻の養子Tの妻が亡くなった。再びSは、彼女の死の責任を問われ、家を焼き払われ、Lと一緒にG村を去った。同じくその責任を問われたJの妻も、家族と一緒にG村を去った。

一連の出来事とおして、故Cの弟たちと故Cの第4妻の子供たちが、故Cの土地を追われた。結果からみれば、土地を巡る一族の争いの過程と考えることもできるだろう。しかし、これらのことがミエル・アグワラ再興の翌年から始まったことを考えると、それが何らかの契機を提供したと以下のように推論することもできる。ミエル・アグワラ儀礼再興を経て、故Cのティボは祖霊の安息地へと誘われた。そのことによりUとLをクランのリーダーとする故Cの遺志は、過去のものへと変容をとげた。それは故Cの妻2人の死を経て、故Cから相続した土地の所有と使用について、生者の積極的な関与を許容することになった。

「おわりに」を書き始めた時、Jmから電話がかかってきた。G村はどうかと聞くと「何も変わらない」という答えが返ってきた。Uも、Kも、Wも、Tも元気だという。しかし彼にLのことは聞けなかった。声の向こうに、強くて明るい太陽の光と赤い土が感じられた。雨季が始

まる時期だ。西ナイルの赤い大地にも雨が降り始め、サイザル麻の緑色が光に映えて、子どもたちはシロアリを捜して草原に腹ばいになっていることだろう。「2月に来なかったので心配している」と Jm は言うので、「8月には行くから」と答えた。そして翌週、J から電話があった。湖岸の村でボートを作っているという。妻も元気だし、L とは電話で話して元気にしているという。私は彼らの日常が続いていることに少し安堵した。

G 村の C 一族の人たちと儀礼を再興したことが、今回の出来事にどのように関係しているのか、まだ十分に考察できていない。再興を企画した私自身の調査のあり方も問われなければならないだろう。しかし、これは現在進行中の出来事だ。本稿は未来の論考のための備忘録の意味を込めて、関係者たちの証言を記すことを試みた。

参考文献

- 田原範子 2011「移動に住まう人びとはどこに埋葬されるのか—東アフリカ・ナイロート系アルル人のティボ、ジョクアビラをめぐる」『国立歴史民俗博物館研究報告』第169集、167-208頁。
- Tahara, N. 2012, Preparing Myel Agwara for Cezario Oungi Unu: An Overview of the First and Second Meetings, *The Bulletin of Shitennoji University*, Vol.53, pp.387-406.
- Tahara, N. 2013, Preparing Myel Agwara for Cezario Oungi Unu (2): From Myel Agwara to Selewa, *The Bulletin of Shitennoji University*, Vol.56, pp.439-470.

謝辞

本稿では、匿名の査読者2人からの課題「ミエル・アグワラ儀礼再興とコミュニティ変容の関連性」「地域性と個別性をともなったシティズンシップを構想するものとして人類学上の議論へと発展させる可能性」について、展開できなかった。これらの課題について、近い将来、論考したい。査読者2人に感謝している。もちろん、本稿の文責は私個人にある。

本稿は、日本学術振興会の以下の研究助成を受けることで執筆が可能であった。

基盤研究 (A) 「アフリカ漁民の比較研究—水域環境保存レジームの構築に向けて」(課題番号: 15H02601、研究代表者: 今井一郎)

基盤研究 (C) 「アフリカン・シティズンシップの解明: ウガンダ社会の動態とシティズンシップの関連性」(課題番号: 16H05664、研究代表者: 波佐間逸博)

基盤研究 (C) 「シティズンシップとモビリティ—ウガンダ・アルバート湖岸地域の共生原理」(課題番号: 16K04126、研究代表者: 田原範子)。

ここに記して感謝を表す。

注

- 1) 儀礼後、隣村に住む姻戚として、儀礼を取り仕切った呪具アンバヤの持ち主 O 氏が 2014 年 10 月に急逝した。前腕がしびれて、まもなく亡くなったという。彼の死には謎があったと彼の縁者は語る。これについては別稿に譲る。
- 2) アンバヤは、ロツソ (*lasso*) と呼ばれる動物 (イタチの一種と思われる) の革に、木製の笛と薬草をつけたものである。アンバヤには呪力があるため、一般の人びとは持つことさえできない。クランや親族の長として一族を治める人と病気の原因を捜したり治したりするアジョガ (呪医) だけが使うこ

とができる。

- 3) C クランのアビラは、アヨモ (*ayomo*) の枝を三本土に埋めたもので、周りにはアビラのための薬草、アビラに日陰を作るための木、アビラを守るためのアスカリが配置されている。ジョクは、アニョド (*anyodo*) とよばれるもので、出産を助ける力がある。マンゴーの木の下に、高さ 50 センチメートルほどの小さな茅葺きの小屋が二つ作られている。その周りの草は刈り込まれ、周りが木製の柵で囲われている。ここに入るには、素足にならなければならない。
- 4) *Dero Para* = *my glanary* と呼ばれる女性たちの頼母子講の相談役をしていた。毎週金曜日、メンバーが集まり、ミーティングを行う。

What Happened after the Ritual of ‘*Myel Agwara*’: The Deaths that Occurred in the G village of West Nile in Uganda

Noriko TAHARA

The Alur people, belonging to the West Nile region in Uganda and the north-east end of the Democratic Republic of Congo, used to perform the ritual of ‘*myel agwara*’ to mourn the death of a person, a few years after the death. *Myel agwara* literally means ‘the dance of *agwara* (long horns)’, and is planned by the offspring of the deceased. It is believed that after the *myel agwara*, the person’s spirit finds peace in the world of ancestors.

In 2012, we revived *myel agwara* to mourn the death of C of G village in Nyravur sub-county in Nebbi, Uganda. However, it was a challenge for us, as the *myel agwara* had not been performed in Uganda since 1987. To perform the *myel agwara* in the right manner, the participation of the partner clan is necessary. However, we could not find a partner clan to participate in the ritual, and therefore, we performed only some of the right procedures using the super natural power of ‘*ambaya*’. A few years after the *myel agwara* was performed, four families of the same clan were banished from the village. This was triggered by the deaths of a child and a woman in the clan.

In this article, I will describe the events surrounding the ritual in the village in chronological order, along with narratives of the local people, in order to enquire into the relationship between the revival of the ritual and the conflicts that occurred within the clan.